

学校における体験活動の充実を図るための手だての工夫・改善
～児童・生徒の「豊かな心」を育成するために～

令和 7 年 2 月
東京都教育委員会

I 研究主題設定の理由

少子化などの進展とともに、リアルな体験が不足する傾向が、コロナ禍以降、拍車がかかっているという指摘や、家庭の経済環境によって体験機会に格差が生じているという指摘がある。そのため、学校教育における体験活動の一層の推進が必要であると考えられる。

「東京都教育ビジョン（第5次）」（東京都教育委員会 令和6年3月）では、「積極性や協調性、コミュニケーション力、他者理解、感性等の豊かな心の育成につながるよう、都内の全ての公立学校を対象に、体験活動の機会を提供する『笑顔と学びの体験活動プロジェクト』を活用するなどして、学校がねらいに応じて、体験活動の充実を図ることができるよう取組を推進します」と述べられている。

体験活動の充実の実現に向けては、「体験活動事例集－体験のススメー」（文部科学省 平成20年1月）において、①体系的で「まとまり」のある活動とする、②校内連携や、家庭、地域、関係機関と十分な連携を図る、③児童・生徒の自発性や自主性を生かす、などの留意点について示されているものの、どのような指導を具体的に行えばよいのかまでは明示されていない。

体験活動の実施にあたって、適切な場所の選定や費用、教員の多忙感の増加などに対する懸念も指摘されている。

以上のことから、体験活動を充実させるにはどのような課題があり、どのように工夫・改善すればよいのか具体的に考える必要があると考えた。そこで、研究の主題を「学校における体験活動の充実を図るための手だての工夫・改善～児童・生徒の『豊かな心』を育成するために～」と設定した。

II 研究の目的

体験活動を児童・生徒の生活や学びに結び付けるために、計画段階と実践段階などの視点から指導の手だてを捉え直し、具体的な改善の方向性を提案する。

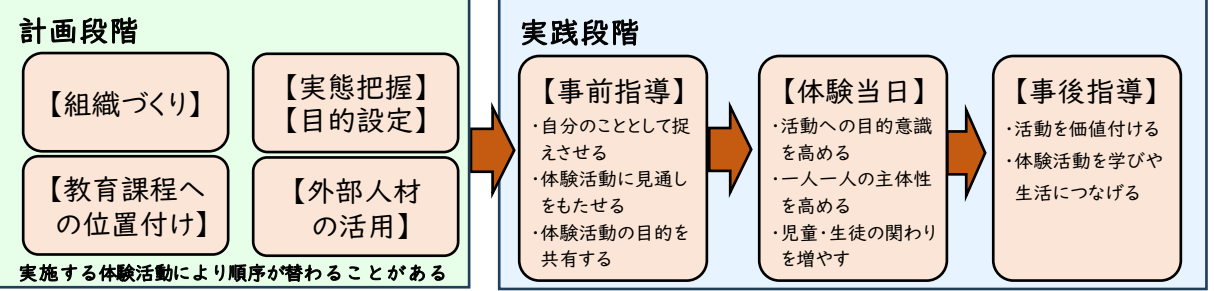
III 研究内容

1 本研究における「体験活動の充実」とは

- (1) 「体験」と「体験活動」の違い
- **体 験**…日常生活で自然に起こること、何かをすること、単発的な経験
 - **体験活動**…意図的・計画的に行った学校の教育活動に関わる体験
直接的に人や社会等と関わる体験
- (2) 「体験活動の充実」とは
- 体験したことを生活や学習に児童・生徒が自ら結び付けたり、教師が価値付けたりすること
 - 体験活動を通して、児童・生徒の「豊かな心」が育成されること

2 具体的な改善の方向性を考えるために

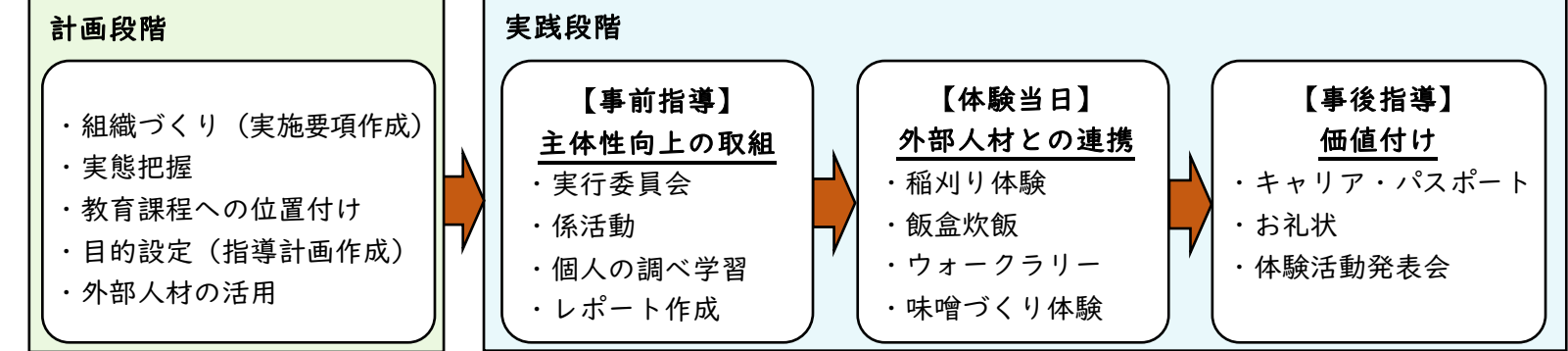
既に各学校で行っている体験活動について分析し、児童・生徒の生活や学びに結び付けるためのポイントを抽出した。そのポイントについて、実際の体験活動の流れを踏まえて「計画段階」と「実践段階」に位置付け、具体的な改善の手だてを検討した。



IV 研究内容を踏まえた指導資料

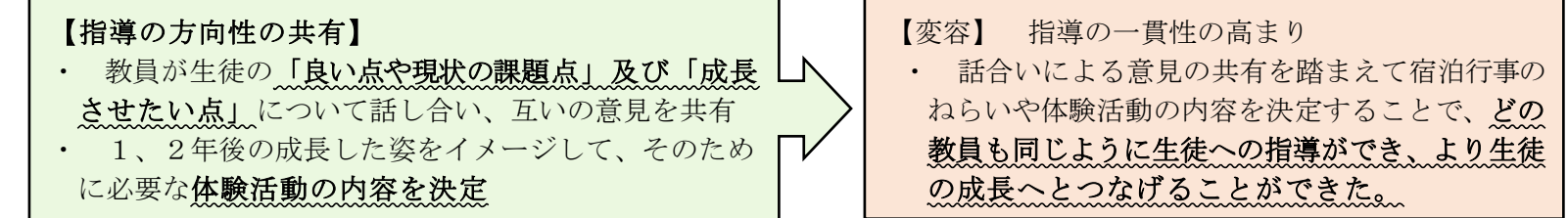
1 旅行・集団宿泊的行事の充実 【中学校 第1学年（例）】

- (1) 内 容 集団宿泊的行事（移動教室）
- (2) ねらい 豊かな自然や文化に触れる体験を通して、学校における学習活動を充実、発展させる。
- (3) 実施した内容及び体験活動の充実を図るための手だての捉え直し

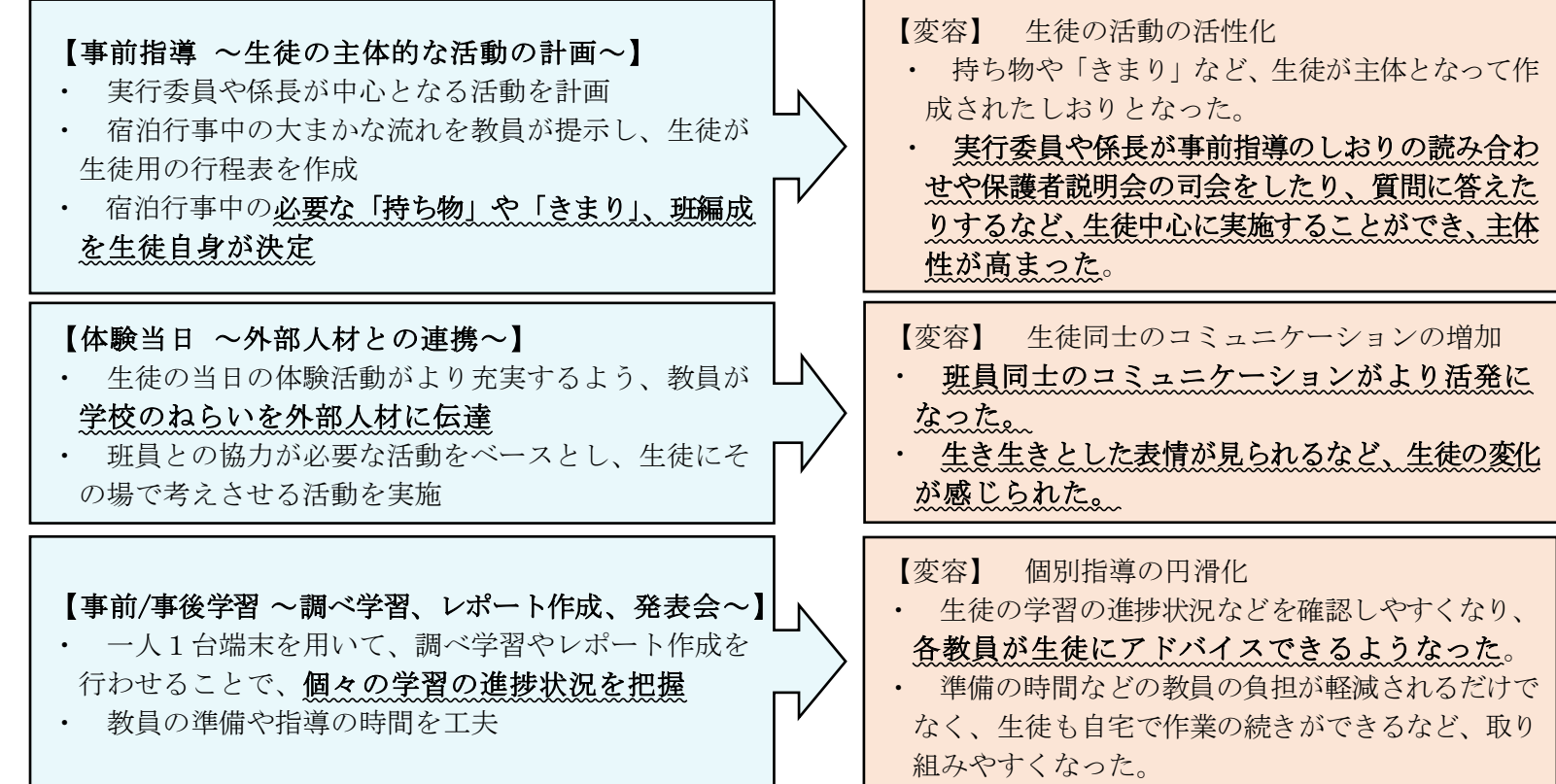


(4) 体験活動の充実を図るための手だての工夫

ア 計画段階における体験活動を充実させる主な手だてと変容

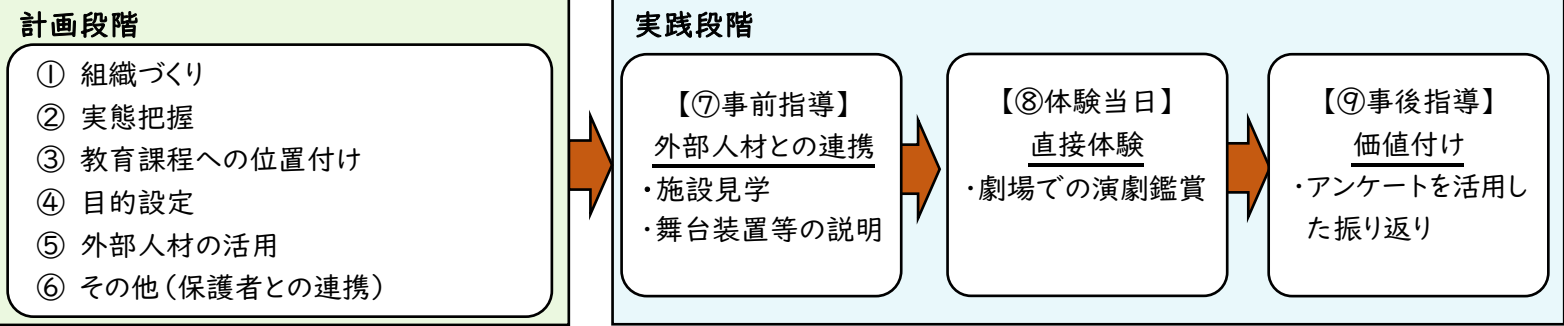


イ 実践段階における体験活動を充実させる主な手だてと変容



2 「笑顔と学びの体験活動プロジェクト」を活用した体験活動の充実【高等学校 第1学年（例）】

- (1) 内 容 芸術鑑賞
- (2) ねらい 事前指導の充実を図り、生徒の豊かな創造力や思考力を育成する。
- (3) 実施した内容及び体験活動の充実を図るための手だての捉え直し



① 組織づくり	② 実態把握	③ 教育課程への位置付け
・ 管理職がリーダーシップをとり、組織を決定した。 ・ 発達の段階に応じた継続的、系統的な指導体制を確立した。	・ 生徒が過去に経験したことのある体験内容や興味・関心が高い内容についてアンケート調査を行った。	・ 教科と関連付けることが可能か検討し、教育課程に位置付けた。
④ 目的設定	⑤ 外部人材の活用	⑥ その他（保護者との連携）
・ ②で把握した実態を基に、ねらいを明確にした実施計画を立案し、学校全体に共有した。	・ 体験先と、公演を支える様々な仕事などに触れる事前指導の内容を調整した。	・ 保護者に実施要項を配布し、教育活動への理解を得た。
⑦ 事前指導	⑧ 体験当日	⑨ 事後指導
・ 演劇や舞台を支える仕事について興味・関心がある生徒（希望者）を対象に、演者や公演に使用する機材などに触れる機会を事前に設けた。	・ パンフレットを配布し、生徒の興味・関心や鑑賞への期待感を高めた。	・ アンケート作成ツールを利用し、体験の意義や感じたことを振り返り、学びを深める時間を設けた。

- (4) 体験活動の充実を図るための手だての工夫
- 実施した内容の充実を図るために、計画段階と実践段階の視点から指導の手だてを工夫した。

計画	・ 学校行事や総合的な探究の時間などの教育課程に位置付け、学校全体で運営（上記③） ・ 生徒の発見や感動をホームページなどに掲載し、家庭とも体験活動の成果を共有（上記⑥）
実践	・ 学年全体で探究的な学びを取り入れ、事前に演目内容を理解（上記⑦） ・ 生徒がゲストとして公演に参加するなど、学校独自の企画を演出（上記⑧） ・ 公演終了後に演者、音響や照明及び演出を担当する専門家に、質問やインタビューの時間を設定（上記⑧） ・ 体験の意義や感じたことを行事や教科指導につなげ、継続的に指導（上記⑨） ・ キャリア・パスポートを活用して学びの履歴を蓄積（上記⑨）

- (5) 事前指導を実施した生徒の変容

興味・関心の高まり	豊かな心の育成	職業観の形成
舞台のデザインや道具の移動の仕組み、照明や衣装の工夫について知ること、興味・関心や鑑賞への期待感を高めることができた。	舞台の裏側を支える人の活躍に触れ、間接的に感謝の気持ちを体感したことで、日常で支えてくれる人への感謝を改めて実感させることができた。	専門家の技術で創り上げる舞台の世界に直接触れて感動を味わったことで、自己の可能性や適性の理解、職業観の形成につなげることができた。

V 成果

1 体験活動の充実のための手だての整理

「体験」と「体験活動」の違いについて確認し、計画段階と実践段階（児童・生徒への指導段階）に分けて各学校で行ってきた体験活動の内容を見直すことにより、体験活動の充実を図るための手だてを整理できた。特に、教員や児童・生徒が体験活動の目的を理解するとともに、体験活動後には振り返りや価値付けを行うことが体験活動の充実にとって重要な手だてであることが分かった。

2 校種を超えた協議

小・中・高・特支それぞれの校種から委員が集まっており、協議を通して各校種に対する理解を委員相互で深めるとともに、幼保小や小中の連携、社会に出てからの自己実現についても話題にするなど、系統性を意識した議論を重ねることができた。その結果、上記1のように、全ての校種に共通する重要な手だてを見いだすこともできた。

3 学校の役割の再認識

家庭を取り巻く環境の変化等により、体験してきた内容に差があるということが話題になった。そのため、学校での体験活動の充実は一層重要となる。日頃一緒に学習している友達と同じ体験をし、その体験を生活や学びにつなげるために、教員が適切な手だてを講じる必要があることを確認できた。

4 教員の負担感と体験活動の充実との整合性の検証

体験活動を量的・質的に充実させることによって、児童・生徒の変容を促すことができる。その一助として、「笑顔と学びの体験活動プロジェクト」などの事業や外部人材、地域の資源を活用し、既存のプログラムから児童・生徒の実態に合った体験活動を選択したり、校務分掌に位置付けて年度当初に担当を決めておいたりすることが考えられる。このように新しく体験活動を生み出すことへの教員の負担を軽減する中で、児童・生徒の豊かな心の育成を図ることができると分かった。

IV 課題

1 豊かな心の育成に向けた効果検証

本研究を通して、豊かな心の育成につながる児童・生徒の変容は見られた。しかし、児童・生徒の変容は、明確な数値で表せるものではなく、委員のこれまでの経験や体感を整理していく形で研究を進めることになった。体験活動の充実を図ることで、児童・生徒の変容が豊かな心の育成につながっているのかを引き続き検証していく必要がある。

委員名簿

国分寺市立第一小学校	校長	出町 桜一郎
江東区立第三砂町小学校	主幹教諭	牧野 由貴
国分寺市立第四小学校	主任教諭	安岡 理佳子
福生市立福生第四小学校	主幹教諭	佐藤 元希
足立区立加賀中学校	主任教諭	鶴岡 友樹
多摩市立落合中学校	主幹教諭	難波 裕司
都立田無特別支援学校	主任教諭	國武 淳之介
都立三田高等学校	主任教諭	加藤 景子

担当 指導部指導企画課 統括指導主事 角杉 直美